

# 狂奔 と理性文明へ

ハルナグループ創業者CEO

青木清志



私はこの度の悲劇的な災害に接して、あらためて<日本国>を考えてみよう、かねてから胸中にあった想いに馳せてみました。歴史を読むと、日本の国名が始まるのは7世紀の末頃です。この時代に国名が<倭国>から<日本国>に変わっております。爾来、海で囲まれた列島に1300年を越える歴史を創ってきました。その歴史のなかで、比類のないほど永い平和の時代を経験している国は他にありません。平安時代のおよそ400年、江戸時代の266年、二つの時期でおよそ700年に及ぶ平和の時代があり、日本史の過半は穏やかな歴史であったと記録されております。これほどの永い平和の時間がどうして享受できたのか、かねてより疑問に思っておりました。列島が、ユーラシア大陸と海で離れている事で地政学の条件に抛る理由だったのか、その時代の人々が応仁の乱から戦国時代にかけての内乱を経て、列島が一つの国に収まっている歴史から学びとった知恵であったかも知れません。

しかしこの時代は、世界的には自然な振る舞いだけで国の平和が維持されていく時代では決してなかったはずで、人間は、争い事に明け暮れているか、穏やかな時間を楽しむかでは、人生が違ってきます。平和な700年を経験し、それぞれの世代で累々と継承していく膨大な時間の集積は、日本人の性格、感覚、感性、嗜好、なにかんずく人間性にも、少なからず遺伝子として伝わってきたことと思います。17世紀-18世紀の戦乱の世界で、国を鎖国し日本列島に独特な粋の文化を創りだした江戸時代は、特質すべき日本文明の夜明けを感じるものです。それが洗練された庶民文化の歴史の始まりでした。この時代に遡ることで、日本人の一つの原型を成してきた背景が想像されてきます。19世紀の後半に起きた<明治維新>の革命は、それからの日本の潮流を劇的に変えてしまいました。列強の英、仏は幕府の開国政策に乗じた内乱の拡大で、日本の植民地化を意図していましたが、大政奉還によって阻止されます。内乱を収めた後、この時代の為政者は列強の植民地政策を視野にいれ富国強兵の戦略に狂奔していくこととなります。まさに近代化への道筋はひたすら軍拡の道でした。20世紀の初頭には日清、日露戦争があり植民地支配への政策に傾斜していきこの歴史に終止符が打たれたのは、80年後の第二次世界大戦での敗戦を迎えた時期でした。1世紀近く外国と幾つもの戦争を交え、日本の文明史としては経験のない<狂奔の世紀>でしたが、それまでの3世紀に及ぶ<穏やかな>世紀で培われた独特な精神文化の伝承は、狂奔の世紀を越えて今日の日本人に残されております。その一つに<謙譲の精神>という美意識がありますが、これは他の文明のどことも異なる固有な<徳>で、人への配慮の心です。人が生きていく場の一つである企業活動も、この配慮が働けば社会への貢献がぶれないと思うのです。実は、この度の災害時に幾つものこうした行為を目にしましたが、言葉だけではなく、身に付いた自然の行為は本当に素晴らしいものです。

これまで日本人が創りだしてきた文化の集積である文明の視点から考えて、<穏やかな世紀>と<狂奔の世紀>のどちらに現代の日本人は関心を持っているでしょうか。どちらが、日本の未来に相応しいのでしょうか。この選択は日本の未来を構想する時、極めて重要な要になる事です。1950年に勃発した朝鮮戦争は、それ以後の世界の冷戦構造を作り出す出来事でした。その意味では歴史的な転換点といえます。同時に日本の経済復興が勢いを増す画期的な時期でもありました。この時代の日本で最も注目すべき事は、<社会規範の民主化と国家政策の非軍事化>という二つの選択があったことです。日本国の安全保障は<日米安全保障条約>を基本に非核三原則のもとで、専守防衛に徹する国防戦略を策定しております。自国の<安全保障>を他国に委ねる戦略がはたして是か、非か。日本の為政者は国民的議論を十分にしないまま冷戦の崩壊を目の当りにしても、日本は変わろうとしませんでした。非軍事国を標榜する傍らで、ひたすら経済の極大化を追求するばかりでした。そして<ノ連の崩壊>と時期を同じくして金融・経済の崩壊の歴史を創り出してしまいます。

しかしながら、中産階級主導型の社会をめざす日本の歴史をつくってきた事は極めて画期的な事でした。19世紀に頂点を迎えたヨーロッパ文明が、結果的に植民地支配につながっていったのは、階級社会の権力保持と資産形成の力の信仰に抛ることにありましたが、他のどの文明にもない<庶民が主役>になる文明は、まさに世界に類をみない試みでした。階級対立を極力排する精神から生まれた、いわば挑戦の歴史として評価されるべき事でした。歴史的な新しい試みでの社会の形成過程で、経済活動の負の側面が顕在化していき、活発な企業活動が地域に深刻な公害問題を引き起こしてき

ましたが、この経験が無駄にせず企業のR&Dへの執念は、73年のエネルギー危機に遭遇した時期に、次元を変えて環境技術の分野で競争力を一段と高める成果を実現しております。しかしながら、70年代における真の危機は<経済成長のあり方>を見直す議論が十分になされず、80年代に先送りした事にあります。価値判断を避け経済が量的拡大に暴走する姿を目前にして、歯止めを掛ける事に市場は無関心でした。むしろ支持者としての行動をしてきました。

金融破綻も必然の結果であったと思います。1950年に始まる、第三の文明の歴史がここで同時に破綻の憂き目に遭遇し、<庶民の文明>は脆くも崩れ去ります。70年危機の背景には、シカゴ学派のミルトン・フリードマン教授が掲げる<新・自由主義>イデオロギーと<原油の地政学>的リアリズムの深謀が働いていたと考えられます。危機の時代をどう乗り切るのか、当然ながら変革を遂げていく行動が何より肝要なことで、これまでの<成長追求>モデルの経済運営を<成長活用>のモデルへと政策基本を変える事が必要でした。そうして<質の経済成長>の実現に向かって歩みだしていれば、産業市場のグローバル化の洗礼を受けても、一定の時間で社会の構造変化を吸収できたと思います。

最大の失態は、バブルの崩壊で資産の暴落が起きているデフレーションのさなか、1993年に平岩レポートなる政策理念が提示されたことです。インフレ対策のヴィジョンである<新・自由主義>の理念に基づくものを、デフレ下の日本に示す構造改革案としては、考えられない政策です。さらにこの路線が2001年の小泉政権の構造理念に繋がり、爾来20年に至る経済社会の閉塞感を続けている要因の一つがここにあります。冷戦の終焉は、世界が多極化していく画期的な状況でしたが、東西の市場が拡大し、金融市場のグローバル化で、ランシス・フクヤマが<歴史の終わり>で述べている「市場経済が進めばその先に必ず民主主義があり、やがて世界は一つになり小さな紛争はあっても平和と自由の進展がある」とする主張はまったく幻想の世界でした。今日、その対極の世界が眼前に広がり、未来への懸念が益々高まりつつあるのは、多くの国がこのイデオロギーの呪縛から解き放されていない現実を物語っている証だと思えます。アメリカは国境を越え<自由と民主主義>の理念を盾に、桁外れな軍事費を消費して一極化の世界を進めてきましたが、アメリカは再び<テロとの戦い>という挑戦を受けることになり、この先の混迷の度合いは深まるばかりだと思われま。しかし、バクス・アメリカーナは静かに幕を下ろしていくでしょうが、アメリカ国はやがて違う<貌>をして見事な再生を図るのではないかと想像しています。

さて、日本の<未来>はどのようなのか。

20世紀半ばから、21世紀初頭までの歴史を俯瞰してみると、日本人の精神文化の中核になってきた芯の一つが、抜けていたのではないかと思いがしてなりません。新憲法の法解釈で、自由と民主主義を社会の軌範にして、国の骨格は非軍事を柱とする<理念の時代>を過ごしてきました。しかし、この国をどんな立国にしたいのか、それには何が必要で、何が欠けているのか、その問いかけを曖昧にしたまま、経済の再生に翻弄されてきました。いわば、形而上の精神文化の<伝承と創造>への熱意を、形而下の経済問題に置き替えられてしまった今日の状況に、私は、極めて強い危機感を覚えるものです。社会を構成する全ての分野を横断して世論を喚起させるエネルギーを国民は必要としています。

21世紀、人々の地球環境への配慮は明らかに意識が変わってきており、省資源の対策も細やかに気を使う社会環境ができつつあります。人々は善良な<市民意識>を持ち続けているにもかかわらず、<政・官・財>に広がる日本の為政者らの指導力欠如は、長期的な国家戦略を不確実にし、国家安全保障政策は依然として旧弊なまま改めず、何よりも国の経営健全化のマネージメントが紆余曲折するばかりです。トップの資質低下、政府の短命化の弊害など、政治における統治権の劣悪さに、国民は幾度となく警鐘を鳴らすも政治は変わらず、警告の数が、しだいに無党派を増加させる情けない現実をつくっております。<政治と経済>は同床同夢であるべきで、これほど二つが離れた活動をしている国は少ないと思われま。英国の歴史家A・J・トインビーによれば、(文明は逆境で生まれ、自然的環境や人間的環境からの挑戦に人々の応戦が成功した時に興る。)と述べています。この時代をバネにしたい思いです。さて、<始まっている未来>を9項目の課題にまとめてみました。

- 1, 10年計画で世紀末からの20年間に及ぶデフレ経済社会環境への対応を、政治と経済の一体化の中で挑戦する。
- 2, 2050年を目標に10年の段階的な計画で<超科学技術立国>構想に着手する。
- 3, 日本の<安全保障>の自立的構想を10年以内に実現を目論み国内にあるすべての米軍基地を10年以内に日本に返還。
- 4, 世界の主要国と3年以内に2国間交渉でFTAを完了し、更に広く各国との<安全保障>枠組みと核拡散の条約を締結する。
- 5, 自然、再生エネルギーの社会づくりを2050年を目標に5年計画を重ね再生可能なエネルギーを極める。しかし原子力発電は安全対策の技術を極限まで高め22世紀を目論む。ただし2020年迄にF項目を可能とする中核の新技术をサポートする。
- 6, 国の継続的存在を可能にする戦略として<核の抑止力>をより高度なR&Dにより実現する。
- 7, <日米安保条約>は地位協定をはじめ基本的な刷新をして継続する。
- 8, 2050年の人口の想定を9500人-1億人として未来の国づくりの構想に着手する。
- 9, 国の存在は国民のためにある、存立条件の最大の優先事項は、人々の幸せの実現に叶う事を第一とする政策であること。

日本文明の歴史は<創世記><穏やか記><狂奔期>を経て1950年の朝鮮戦争を挟み新しい扉が開けられました。私はこの1950年からはじまり、いま、そして将来へと続く約1世紀を<理性の文明>と名付け、2050年に駆けて緩やかに時間をかけながら<理性の世紀>が実現されて行くことを願っています。どんな日本にするかは、次の世代の選択にあります。地球の中でも独自性のある文化を創ってきた国として、これからも平和に貢献できる日本であってほしい事につきます。



# 対談

ハルナグループ創業者CEO 青木清志 / 群馬県議会議員(当時) 後藤新氏

## 1.新しい日本文明を作る

**青木:**今の日本は、新しい日本文明を作る過程の時だと思うのです。1990年代、バブルの破綻と同時に経済が大きく破綻し、苦しい時代が今日まで続きました。戦後、アメリカの占領戦略のうでで作られた憲法からはじまり、ずっと高度成長の中で日本が約半世紀過ぎきて、日本人が本当に目指すべきものを考える時なのです。7世紀からの日本を考えると、約1300年間も培われ育まれてきたひとつの日本人の生き方があります。しかし戦後の日本文化は、他者から与えられたものであり、その間は日本文化の潜在力に結びついていなかったと思います。自由、平等、人権などだけでなく、もっと高い価値があるはずです。そこに至ることなく、ずっと一国平和主義の中で経済をひたすら追求してきました。しかし、その先のもっと高い価値、例えば人間の美意識、高い理想、友情、人類愛が重要なのです。この20年間、日本経済がなかなか立ち上がれず、国民の生活は辛抱と我慢の連続でした。そこを真剣に考えなければなりません。この度、東北が大変な災害となり、災害を通じて様々な問題が浮上しました。震災時にいち早く行動された後藤さんはどうでしたか。

## 2.大震災から立ち上がるために

**後藤新氏:**私はまず群馬県の中で災害が大きかった桐生市へ伺いました。震災翌日の3月12日でしたが、玄関や門扉、屋根が壊れていました。前橋より被害は大きいものの、幸いにも損害は少なかったです。しかし東北地方では、地震、津波、原発、風評被害、と次から次へと困難が襲いかかっています。私は東北へ早く伺いたかったのですが、あまり早くても現場を混乱させるだけと思い、あえて報道されていない岩手県北部へ向かいました。岩手は若い頃に2年間お世話になった場所です。伺った久慈市は、市民約3万6千名のうち亡くなった方は3名で、被災地の中では比較的被害が少なかった場所でした。堤防が決壊する寸前で抑えられたなどの運もありましたが、久慈市の被害が最小で防げた理由のひとつに、日頃からの防災訓練が徹底されていたことが挙げられます。堤防をいかに建設するかなど、ハードの部分も重要ですが、ソフトな部分で抑えられるということもあるのですね。とくに人災を避けられたのは日頃の訓練が大きかったと感じました。一方野田村は約4千名のうち37名の方が亡くなられていて、400人が未だに避難されている状況です。皆

さんは9か所の避難所に分かれ暮らしていますが、本来は10か所の避難所がありました。1か所は山にぶつかり逆流した津波に襲われたのです。想定外といえばそうですが、避難所が避難所として機能できていなかったのです。

復旧だけではなく、新生することができなければ、大きな痛手を受けた人にとって新しい立ち直りにならないのではないかと私は考えています。「何ももたないところからの出発ほど豊かなものはない」という言葉があるように、代表の言われる新しい価値、また日本の元来の価値を追求し、日本人が皆で頑張る必要がある。そうしなければ本当の意味での出発にならないと思います。

**青木:**私は今回、政治の無力さを痛感しました。災害と原子力の事故を別の問題として考える必要があると思っています。三陸沖は過疎という問題を抱えながら、高齢者の方々が長年大切に守ってきた土地です。そしていくたびか地震や津波も経験してきた。そこを「想定外」という言葉で片付けてしまうのは酷な話ではないでしょうか。いま地域は無残な姿となり、避難所での雑魚寝が3ヶ月を超えています。その中で、人間が生活していくうえでの配慮にもっと強く政治が介入するべきです。原子力の問題は、長年の積年の問題を感じます。行政と東電の連帯の中で、優れた知識と知恵、技術、判断力を全部透過していくという動きがない。私はすぐにチェルノブイリなどの事故で得たデータベースや知恵を活かし、世界の優れた科学者をお呼びして、どこからどう一番に手を打つべきかを相談するべきだと思います。迅速な情報公開と謙虚な気持ちで、皆さんと一緒に考えていくという行動が必要だったと思います。結果はご存知の通り、近隣の国に説明もなく、汚染水を海上に棄てるという最悪の事態を招いてしまった。なぜ日本には優れた人材がいるのに、彼らの知恵を政策に反映できないのか。なぜすべてを東京電力の一企業の中に閉じ込めてしまったのか。私は疑問を感じています。

## 3.改めて問う政治の役割

**後藤新氏:**確かに東電の企業責任は免れませんが、やはり政治の責任を大きく感じます。縦割りや横割りを解き放ち、いまこそ政治主導をこのような時に発揮するときです。そうすれば世界の英知を集めることも出来ます。オープンではない国柄ではありますが、政治の貧困を感じます。党を問わず実行してほしいと思います。

**青木:**政治の役割は社会にとって非常に大きなものです。今日の日本の政治を考えると、この国をどう引っ張っていきたいのか、どう創りたいのかが見えてきません。この20年間、どれだけ日本経済が苦勞し、企業が過酷な条件の中で生きてきたか、認識している政治家が果たしているのでしょうか。1ドル80円を切る円高のなかで、経済界は歯を食いしばり、人々は無駄を省き、技術開発をとことんやり、様々なところで大変革を行ってきました。かなり厳しい状況にも関わらず、2010年3月時点で上場企業のキャッシュフローは約121兆円(税抜)。円高にも関わらず、これだけの成果を残しているのは、苦しい期間を通じ筋肉質に鍛えられたことが大きいです。ただ製造業でみると、上場企業813社を45万社の中小企業が支えるピラミット型となっていたのが、この20年間で20%の約10万社以上が消えてしまいました。この800社の上場企業は、為替の問題を抱えているため、製造現場を中国などアジアや地球の裏側へと移転せざるを得なくなったからです。結果、10万社程があつという間になくなったのです。なくなったというのは雇用が失われたということ。製造業に変わるサービス業も生まれましたが個人消費の低迷もあり上手くいかない。そして雇用の流動が発生し、不安定な派遣労働が増えました。製造業に派遣が入ることで、技術の伝承や現場を創るという連帯感が欠如し、ただ時間を売るだけの現場になってしまいました。これが日本の「ものづくり」には大きな打撃となりました。

もうこれ以上日本の製造業が広がるとは思えない。日本は戦後、製造業の勢いで高度成長を続けてきました。しかしバブルが崩壊し困難な状況に直面しました。その時、「ものづくり」の未来像を掴む必要があったものでできませんでした。そして世界の需要の問題と常に直面し、新しいあり方を設計しなくてはならないのにそれができず今日を迎えています。東北の災害に際し、日本人の献身な連帯感の中で共鳴する姿を私は経験し、日本をもう一度再設計する時期に来ていると思うのです。仮に途上国であれば、社会の安定を求めるために経済成長を追求することが優先されますが、すでに基盤があるため、置かれている立場が途上国とは違います。日本は世界と比べて実収入が高いものの、豊かさを実感する人が少ないという矛盾があります。実際今の政治家の中に、生活に窮する国民の実情を理解している人が何人いるのでしょうか。そのギャップが日本の貧困さを更に深刻にしています。経済活動は政治とリンクしているのです。巨大なビルを作り、大きな資本を創り出していく中に人間としての満足があるわけではなく、元来日本人は非常に繊細で、生活の中の優美な物を愛好する国民なのです。例えば建物にしても、日本の伝統的な木と紙と土を使い活かすということは、何時の間にか片隅になりました。本来の日本的価値を現代の中で育み、活かすことができれば、日本は生まれ変わるのではないのでしょうか。その意味で、日本の新しい文明の大きな変わり目になっていると思うのです。

#### 4.日本の価値をいま一度見つめる

**後藤新氏:** 今回の大震災を受け、今が日本の転換点だと思えますし、そうしなければいけないと思えます。代表が言われるように、脱経済成長社会が大事だと人々も気づき始めました。これからはGNPの時代ではなく、GNH(Gross National Happiness)の時代と言われています。でもどうしていいのかわからないのが現状です。それには2つ越えなければいけないことがあり

ます。一つはアメリカ型の金融資本主義を越えていかななくてはいけない。与えられた民主主義を越える転換点なのです。二つ目は日本の原点である「ものづくり」に回帰すること。そこには眼に見える付加価値があるからです。江戸時代の鍛冶屋さんや豆腐屋さんもそうでした。高利貸屋が落としめられたのは何も生んではないからです。日本の資本主義の父と言われる渋沢栄一は、株式会社を作る際「経済は徳が伴わなければいけない」と言っています。それは徳を忘れてはいけないということで商売の原点なのです。ところが金融資本主義はそうではないマネーゲームです。日本の築いてきた歴史や文化にはそぐわない。日本はアメリカを真似してはいけないと思うのです。

**青木:** 経済と政治の基盤になるのは、その国の精神的文化なのです。そこを目指さないと政治も経済も成り立たない。日本は精神文化をおろそかにしてきたのではないのでしょうか。

**後藤新氏:** 与えられた民主主義の中で、確かに「自由」「平等」「表現の自由」は新しい風で、戦後は息苦しさからの解放になったと思います。ただ一方で義務を果たさず権利の主張ばかりになってしまった。

**青木:** いま一度、国が建つ由縁はなにか問いただすことが大切です。日本は均質と言われるが単一民族ではない。日本の文化が長い年月をかけ作られてきて、大きな精神文化の基盤として構築されているものを、ないがしろにはしてはいけません。

**後藤新氏:** 代表が言われた自己犠牲や献身や愛は日本の価値であり、一言で突き詰めれば共同体の力だと思えます。その共同体の原点は家族。大家族にも問題がありますし、地域社会の息苦しさもあると思うのですが、それを価値と捉えるべきです。今回の震災で農業や漁業は壊滅的ですが、農業や漁業という考え方ではなく、

「農村力」や「漁村力」という考え方が大切です。夏目漱石は、私の個人主義という有名な講演の中で、日本はこれから個人主義が必要と論じました。しかし対照的に、晩年最後に書いた書は「則天去私」だったのです。天に則り私を去るという意味ですが、いま日本が目指す所だと思えます。

#### 5.日本の自立から文明は生まれる

**青木:** これからの日本をどのような国にするべきか考えた時、文化と精神文化を大事にすることが重要だと思います。その中で日本文明とはどんな文明になるのか。極めて対極にある西ヨーロッパの文明は永続性のあるストックの文明です。300年、400年と石の建築を造り王宮を歴史の中で大切に権威を残し、遺産として受け継ぎ、観光に活かしています。対して日本はストックに対しフローの文明であると思います。フローは極めて短命ですが、常に創造と破壊を繰り返す一つの文明を創り出してきました。これからもそうだと思います。そして日本文明は庶民大衆性の中に文明が培われてくると思うのです。それは新しいものを受け入れ、同化しさらに新しいものにする新陳代謝が大きく働く文明なのです。西洋文化とは成り立ちが違う。そこに目覚めるべきです。アメリカは日本に介入することで、安全保障の問題と地政学からくる問題を巧みに使いこなし今でも日本を属国にしている。日本を自立させない形にしています。日本の文明を本当の意味で作り上げていくことです。精神的な基盤を大事にしていくことができれば、明るい未来がくると思えます。

**後藤新氏:** だからこそ、今もなお日本人の心に平家物語の諸行無常は響くのでしょう。方丈記の「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」という言葉が多く引用されることからわかります。今回の災害で数多くの場所が破壊されましたが、また改めて建設しなければ

いけない。破壊と建設を繰り返してきたこの国ですし、これからも災害はあります。夏目漱石の三四郎でも、「あらゆる所に破壊と建設がくりかえされる」とありますが、建設の部分がものすごく大切なのでしょう。

**青木:** 私は群馬に来て16年目になります。後藤さんともう10年、色々な場面で接する機会がありました。感銘することが多いですね。今日の言葉でも共感することがありました。政治の力は、新しい文明に入る国には極めて重要なことです。後藤さんはまだ若い年齢でいらっしゃる、将来はぜひ首相になっていただきたい人です。トップの夢を持ってほしい。やはり日本のトップをめざすことに期待しています。

**後藤新氏:** 首相は政治家としてのトップですからやはり夢は持っていたいです。夏目漱石は三四郎の中で、日露戦争後日本は発展すると言われていた中「滅びる」と言っている。「熊本より東京は広い、日本はもっと広い、そして世界はもっと広く、世界より人間の頭の中のほうが広い」と言い、囚われてはいけないとも言っている。戦争に勝利したからこそ駄目になり、今回はダメージがあるからこそ再生できると思えます。

**青木:** この20年間は、80年代の有頂天な時代からどん底へと下る時代でした。いまこそ歴史を振り返り、新しい文明を出発させることが大切です。災害を目の前にして、そんな考えを持ちました。

